

美しくつかしい、日本をのせて。

# Cradle

特集  
出羽三山、  
時空を歩く  
庄内憧憬  
Yae 歌手

[クレードル] 出羽庄内地域文化情報誌

7

2017 July/August  
TAKE FREE  
NO.42

Cradle 7

「美しくつかしい、日本をのせて。」  
「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

2017 July/August  
平成29年7月1日発行(毎月奇数月発行)第7巻8号(通巻42号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株式会社 出羽庄内地域デザイン) 電話0236(64)0888  
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3「コアック・コミュニケーション」 電話0234(41)0012

FIDEA GROUP



酒田市 / 飛島・鼻戸崎から望む寺島

夏が似合う 酒田飛島

庄内銀行

三神合祭殿の本堂に立ち、声を出す。空間に色をつけるように、音を響かせてゆく。空を仰ぐと、天界とつながっているような錯覚に陥った。

昨年の夏、出羽三山神社で行われた東日本大震災復興祈願祭「いのちへの祝福」で、奉納演奏をさせていただいた。

羽黒山山頂の三神合祭殿は、シーンと気持ちの良い空気に満ちていた。その中をゆっくりと歩いて本堂に立ち、声を出す。空間に色をつけていくように、少しずつ音を響かせてゆく。空を仰ぐと、天界とつながっているような錯覚に陥った。なんて清々しい空間！山形や鶴岡で2015年に上映会が行われた、ドキュメンタリー映画『つ・む・ぐ』の主題歌「あいをよるおもいをつむぐ」や、震災の日に生まれた子どもたちをテーマにした「名も知らぬ花のように」など6曲ほどを奉納した。私にとって特別な時間だった。

そのあとの宴は盛り上がった。天狗のお面でお酒をいただいたのは初めてのことだったし、皆さん

との交流もできて本当に楽しかった。斎館の布団については午前3時頃。にもかかわらず翌朝はすっきりと目が覚めた。

そしていよいよ湯殿山での滝行。人生で一度は経験してみたかった、お滝行。禊用の白装束に着替え、先達に導かれながら標識もなく舗装もされていない山道や川を15分ほど歩いた。大きすぎず小さすぎず、ほどよい滝の中に一人一人入っていく。私語や撮影は禁止。誰とも会話をすることなく自然に入れ替わって滝へと入る。時間も決められていない。自分が腑に落ちるまで、納得するまで、滝中に身を置くことができるのだ。

手を合わせて「神拝詞」を何度も唱え、滝に打たれた。背中に気持ちの良い刺激が走る。しばらく打たれていたら、次第に温かいものが体の中を流れていく気がして、優しい気持ちがかみ上げた。

山や滝や川はずっとずっと昔から、変わらずにここにあった。目の前のことに振り回されて一喜一憂している自分が小さな存在に思えて、自分の何かを祓うというよりは「あ、そうだった！」と気づかされるような感覚。自然の中に取り込まれたような感覚だった。「大丈夫、何も心配ないよ」と、滝に教えてもらった。

考えてみれば日々修行。3人の子を育て、農業もしながら歌をうたう。自由な時間はゼロ。でも生きていることをいつも実感できる。生に向き合っている時間。感謝しなければ——。この旅は私に、いろんなことを教えてくれた。



昨年8月7日、出羽三山神社三神合祭殿での奉納演奏

やえ/歌手、シンガーソングライター。故藤本敏夫、歌手加藤登紀子の次女。「名も知らぬ花のように」が日本ユニセフ協会「ハッピーバースデー3.11」CMソングやTBSドラマの挿入歌となり大きな反響を呼ぶ。他、ディズニーマン映画「くまのプーさん」のテーマ曲など多くのCMや映画などの音楽を手がける。昨年、デビュー15周年記念アルバム「Yae alive」(今ここに生きている)をリリース、全国でコンサートを開催。現在、家族5人で千葉県鴨川市の「鴨川自然王国」で、農的生活を送り、テレビ出演や「渋谷のラジオ」「ラジオ関西」のパーソナリティーも務めながらライブを中心に活躍中。

特集

# 出羽三山、 時空を歩く

開山1400年を超えて

出羽三山は昨年、日本遺産に  
認定されました。

神仏習合の時代から、

月山、羽黒山、湯殿山を

過去、現在、未来の時空でつなぎ

死と再生を果たす御山として

諸人を受け入れてきたその信仰世界には

自然を敬い畏れ、祈りの対象とした

日本の尊い精神風土が息ついています。

聖なる地、出羽三山へと

海外から、都会から、来訪者が増える今、

彼らが導かれしその理由を訪ねて

出羽三山の一峰、羽黒山を歩きました。

自然の中に身を置き、無心に歩く先で

さまよい続ける今の時代に

光さす兆しを見たような気がします。

# 日本を訪ねる 聖地巡礼

今回、羽黒山を歩くのは、羽黒修験の先達である  
星野文紘さんと、山伏修行を体験したお二人。  
江戸時代にひらかれた参道を行きながら、  
この聖地に漂う日本の時空間を旅します。



エバレット・ブラウンさん  
大槻レナさん  
星野文紘さん

「門の先の空気が違って見えるのは、人々によって祈られてきた空間だからだね」と星野さん。出羽三山は古くから日本の神道と外来の仏教を結ぶ「神仏習合」の修験の霊山として、人々の信仰を集めてきました。それが明治元年の



写真家  
エバレット・ブラウンさん  
Everett Kennedy Brown

1959年、アメリカ・ワシントンD.C.生まれ。大学時代に文化人類学を学び、世界を旅する中で、1988年に日本に移住。epa通信社日本支局長を経て、現在は千葉県いすみ市で、奥様の料理研究家中島デコさんと農場「ブラウズフィールド」を経営。近年は、日本の本流を探求する手法として「湿板写真」を用い、日本文化の多様性を表現している。著書に『俺たちのニッポン』（小学館）、『日本力』（松岡正剛氏との共著・パルコ出版）、『Japanese Samurai Fashion』（赤々舎出版）他多数。

「神仏分離令」によって神山となります。しかし出羽三山は今も神仏習合が色濃く、羽黒山は聖観世音菩薩によって現世、月山は阿弥陀如来にて過去、湯殿山は大日如来にて来世と、それぞれ仏の浄土を表し、この時空間をつなぐ信仰が「生まれかわりの山」として伝えられています。大槻さんは初めて山伏修行に入った時のことをこう振り返ります。「大自然のふところの深さや恐ろしさを感じ、自分が自然の一部だと思いつことで、子どもの頃のような純粋な身体感覚を取り戻せると、出羽の三山に教えてもらいました。『心と体が共に純化していく感覚』は、普通の山歩きとは一線を画す、修験ならではの素晴らしさです」。大槻さんにとってその感覚はまさに、「生まれ変わり」を促すリセットの旅だったといいます。それではいよいよ聖地、出羽三山の現世の御山へと入ります。

翠雨滴る6月の朝、羽黒山の宿坊街・手向の「大聖坊」を出発した3人は、世俗から聖なる世界へと歩を進めます。山伏修行では黙々と駆ける御山を、今回は自然と歴史にふれながらの登拝です。

——随神門「すいしんもん」  
参詣道の入り口にあたる随神門。ここから先が神域となります。

——祓川「はらいがわ」  
山頂まで続く2446段の石段と杉並木が連なる参道は、距離にして1・7キロ。羽黒山50代別当天看の時代に完成したこの参道の敷設は、慶安元年（1648）から13年を費やした大事業でした。随神門をくぐってすぐの急な下り

坂は「継子坂」。ここは奈落への道であり、行きつく先は地獄の底。そこで禊を行った者だけが浄土（山頂）へとたどり着けるという仏の世界を表しています。祓川はいわば三途の川であり、修験者はここで身を清め、山に入ります。「水の流れに山から運ばれてくる

エネルギーを感じます」というエバレットさんは、山内でここが最も好きな場所だそう。「日本のすばらしさは水と緑。そして、5日おきぐらいに季節の変化が感じられること。昨日、羽黒に着いた瞬間の空気は、春でもなく夏でもない薫緑のにおいがありました」。

Special Edition  
出羽三山、  
時空を歩く



僕が日本の文化や伝統に惹かれるのは、そこほかとない「日本の本流」を感じるからです。自然と一体になり、感性的に暮らしてきたかつての日本人たち。そこには開放的な生命のよろこびがあります。（エバレット）



山伏の祈りの対象は、神様、仏様、そして大自然。今、暮らしている街に森はなくとも、自分を包む環境すべてが感謝の祈りの対象であると、出羽三山に入って気づくことができました。(大槻)



とエバレットさん。五重塔を後に、「二の坂」からは長い坂道。参道は「産道」でもあり、生まれ出る苦しみを、身をもって体験する道でもあるとのこと。「二の坂」にさしかかったあたりで、急に空が開いたように光がさしました。

しばらく散策を楽しんでいると、一転にわかにかき曇り、突然の豪雨！「都会では雨に濡れることもなかなかないので、自然の中では、雨の温度とか、風が木を揺らす音森から立ち上る匂いをただ受け止めてみるんです。すると、自分の存在は自然と共にあることを思い出します。修行の中では、そうした自分の『想い』が腑に落ちていく感覚がありました。帰京してからも、街の風景が違って見えました」と大槻さん。



羽黒山伏  
大槻 レナさん  
Otsuki Rena

1973年、東京都渋谷区生まれ。東京在住。都立の進学校に入学するも、大学受験を放棄。卒業後は化粧品会社に勤務後、著名写真家の専属プロデューサーに転身。国立美術館での展覧会、作品集制作、イベントの企画や広報を担当。2011年の東日本大震災を機に常勤を退き、アンシエイトプロデューサーに。現在はお父様の経営する会社を継ぎ、代表取締役を務めながら、フリーランスで執筆や音楽制作も行う。お母様の故郷である長野県飯山市の地域おこしにも参加、修験を復活させる活動や、都会の人々が多拠点生活をするための場づくりも行っている。



雨脚も弱まり、眼下に庄内平野が見え始めたところで、再び出発。しばらく平坦な道を歩みます。

——南谷「みなみだに」

三の坂の手前で進路を変え、右に折れる道を行います。雨でぬかるみながら10分ほど歩くと、鬱蒼

とされた杉林が途端にひらけて、涼しい緑が目の前に広がりました。ここが南谷、別当の住坊「紫苑寺宝前院」跡です。「羽黒山内で天空が開けているのは山頂とここだけ」と星野さん。元禄2年(1689)旧暦6月3日、俳聖松尾芭蕉は「おくのほそ道」で出羽三山に詣で、5日間を過ごしました。南谷は、芭蕉が逗留し、俳諧興行した地で「有難や雪をかほらす南谷」の句を残しています。

——国宝五重塔

素木造り、柿葺きの三間五層からなる、東北唯一の国宝の五重塔。「昔の人たちはそこに神が宿ると感じたら、こうして懸命に塔を建てたり道造ってきた。出羽三山を訪れる外国の方たちが、ここに来ると感じ入るものがあると言ってくれど、その根底にあるのは『祈り』だね。今、必要なのはこういう聖地から何を感じ取れるかということ」と星野さん。「物質文明は思いっきり経験したから、本当の豊かさを求めているんでしょうね。モノを持たなくとも、日々の中の美しさや自然の変化に気づく感性を持つ方が豊かな生き方。修験道はその感性を開くものですね」



エバレットさんも大槻さんも南谷を訪れたのは初めて。「地上の楽園のようですね。ポーっとするには最高の場所」とエバレットさん。星野さんは「意識、無意識の境界がないのが聖地。聖地とは、ポーっとするところなり(笑)」。

Special Edition 出羽三山、  
時空を歩く





後の関所である「三の坂」を歩き、山頂への鳥居をくぐります。

### ——羽黒山山頂

観音浄土である山頂には、出羽の三神である月読命、稲倉魂命、大山祇命を合祀する「三神合祭殿」が鎮座しています。文政元年（1818）に再建された茅葺木造の豪壮な社殿で、ここに参れ

ば三山を詣でたことになります。星野さんの「再拝、拍手」の先達で、エバレットさん、大槻さんも共に「諸々の罪穢祓い禊で清々し」に始まる神拝詞を奏上しました。「合祭殿は神仏習合時代の造りで、



羽黒山伏 既修松聖  
星野文紘さん  
Hoshino Fumihiko

1946年、宿坊「大聖坊」の三男として生まれ、1971年に東洋大学文学部を卒業後、秋の峰に入峰し、山伏名「尚文」を拝命する。13代目を継承したのち、2007年に冬の峰の百日行の松聖を務め、2008年より、松例祭の所司前を務める。出羽三山神社責任役員理事、出羽三山祝部総代。出羽三山のみならず全国の修験の山で山伏修行の先達を務める他、講演会やトークショーなどにも数多く招かれ、修験道のあり方や山伏としての知恵や思想を通して、「生きるヒント」を伝えている。昨年、初の著書『感じるままに生きなさい—山伏の流儀』（さくら舎）を刊行。

神社とお寺が融合した建物。先人たちは神の山に変えながらも、古来の修験道を守ってきた。それが出羽三山の信仰の姿。過去世から来世へ、先人たちは魂のまにまに、生きとし生けるものとしての祈りを、この御山に捧げてきたんだね」と星野さん。大槻さんとエバレットさんにも、「日本の遺産」としての出羽三山について話していただきました。「茶道や武道など、日本には多くの『道』があります。その『道』はただ技を磨くだけではなく、心の在り方を根底から問うてくれるもの。修験道はまさにその一つです。その道は海外の方々にも、日本の伝統や精神をまっすぐに伝えてくれるはずですよ。



南谷

自然と暮らしの中に神を宿し、祈ってきた日本の思想。大自然に身を置いて感じるままに生きていいと御山は教えてくれます。「受けたもつ」という山伏の言葉は、神と仏、生きとし生けるすべてを許容する出羽三山の象徴です。【星野】

## Special Edition 出羽三山、時空を歩く



言葉や文化の差異を軽々と超えて、共にこの星の上に生かされていることを、静かに、力強く、教えてくれると実感しています」（大槻）。「日本の人たちは戦後、かつてのすばらしい文化と乖離したことで、過去とのつながりが見えなくなり、目の前のことしか考えられなくなってしまったように思います。しかし物質文明を昇華した今、本来的な『日本の本流』へと立ち返っていくのではないのでしょうか。僕にとって出羽三山は、時代を超える体験ができる場所。自然の野性的な力の中では自我も消え、自然に溶け込み、ただの生命体になれる。この開放感こそ、僕の好きな日本です」（エバレット）。





「門前の宮」手前に祀られている「豆腐地藏様」。

第24代出羽三山神社宮司の宮野直生さんは語ります。「これが今に引き継がれる出羽三山信仰の姿です。古来、三山信仰は人生儀礼の一つとして成り立ってきました。こうした信仰の在り方はかつて全国各地の山岳霊場にもありましたが、明治以降はどこも激減しました」。

実際、江戸期は336坊あったといわれる手向の宿坊も現在は30坊へ。講の数も減りました。しかし出羽三山は、羽黒山伏たちが宿坊の継統を決意したことで、坊が壊滅せず、門前町としての姿を今に保つ類まれな地域

その一つが、随神門の右手前にある天地金神社を全面改築し、出羽三山大神を勧請して「門前の宮」としたことです。これによって山頂登拝が難しい参拝者に対し、麓でも御祈禱ができるようになりました。また随神門界限の観光も楽しんでいただきたいと、社務所北側の庭園に散策路を整備。鎌倉時代に遡るとい由緒ある庭園が、史上初めて一般公開されました。さらに山頂の霊祭殿隣に「千佛

堂」を建立。二百数十軀の仏像が常に参拝できるようにしました。「神社境内になぜ仏の安置堂が、という声もありますが、これは神仏習合のお山であった歴史を伝えるもの。長年にわたって培われてきた出羽三山の伝統文化で、変わらない山の姿です。でも人の有様は時代とともに変化します。不易である山という場の力（神）と、流行である人との関わり方は、いつの時代も問われてきました。その点を、今を生きる私たちも見つめ続け、進まないといけません」。

本質を見失わず、変化を続ける出羽三山。山中には芭蕉が訪れた頃から変わらない「不易流行」の風が流れているようです。



随神門の右手前にある「門前の宮」。今春から御祈禱の受付を開始した。



「今後もっと四季折々に散策が楽しめる庭園にしていきたい」と語る宮野宮司。今春、初めて一般公開となった社務所北側の「出羽の里門前庭園」にて。



山岳信仰の山で、修験道の行場である出羽三山。その信仰圏は広く、東日本一帯に及びます。三山の門前町・手向の宿坊主を始めとする羽黒山伏は、晩秋から春にかけて自分の壇中（霞場・旦那場）をまわり、祈禱して御札を配り、三山参りの約束を取りつけます。そして夏に講中の道者が宿坊に来ると、精進料理でもてなし、三山参り成就を祈願し、山伏による先達のもと三山参りを行います。

# 守り継ぐものと 変えるべきのもの

出羽神社、月山神社、湯殿山神社の総称である出羽三山神社。時代とともに変化する山の姿について宮野直生宮司に伺いました。



2 羽黒山の随神門



3 羽黒山の石段



4 羽黒山のスギ並木  
国指定特別天然記念物  
ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン 三ツ星



5 羽黒山の爺スギ  
国指定天然記念物



6 羽黒山五重塔  
国宝



7 羽黒山南谷  
県指定史跡



8 羽黒山斎館  
鶴岡市指定有形文化財



9 羽黒山三神合祭殿  
国指定重要文化財



10 羽黒山蜂子神社  
鶴岡市指定有形文化財



11 羽黒山正善院 黄金堂  
国指定重要文化財



12 手向の宿坊街  
鶴岡市歴史的風致維持向上計画重点区域



13 松例祭の大松明行事  
国指定重要無形民俗文化財



14 出羽三山の精進料理



15 羽黒山の峰入り



16 羽黒古道



17 清川関所跡



19 月山神社



20 八方七口



21 月山神社出羽神社湯殿山神社  
月山出羽湯殿山三神社社殿  
(旧日月寺本堂) 国指定重要文化財



22 湯殿山神社(旧本道寺)



23 本道寺 代参塔群  
西川町指定有形文化財



24 湯殿山神社(旧大日寺)



25 大日寺 代参塔群  
西川町指定有形文化財



27 六十里越街道



28 旧遠藤家住宅  
県指定有形文化財



29 大日坊 仁王門  
県指定有形文化財



30 大日坊の皇壇スギ  
県指定天然記念物



31 注連寺 七五三掛桜  
鶴岡市指定天然記念物



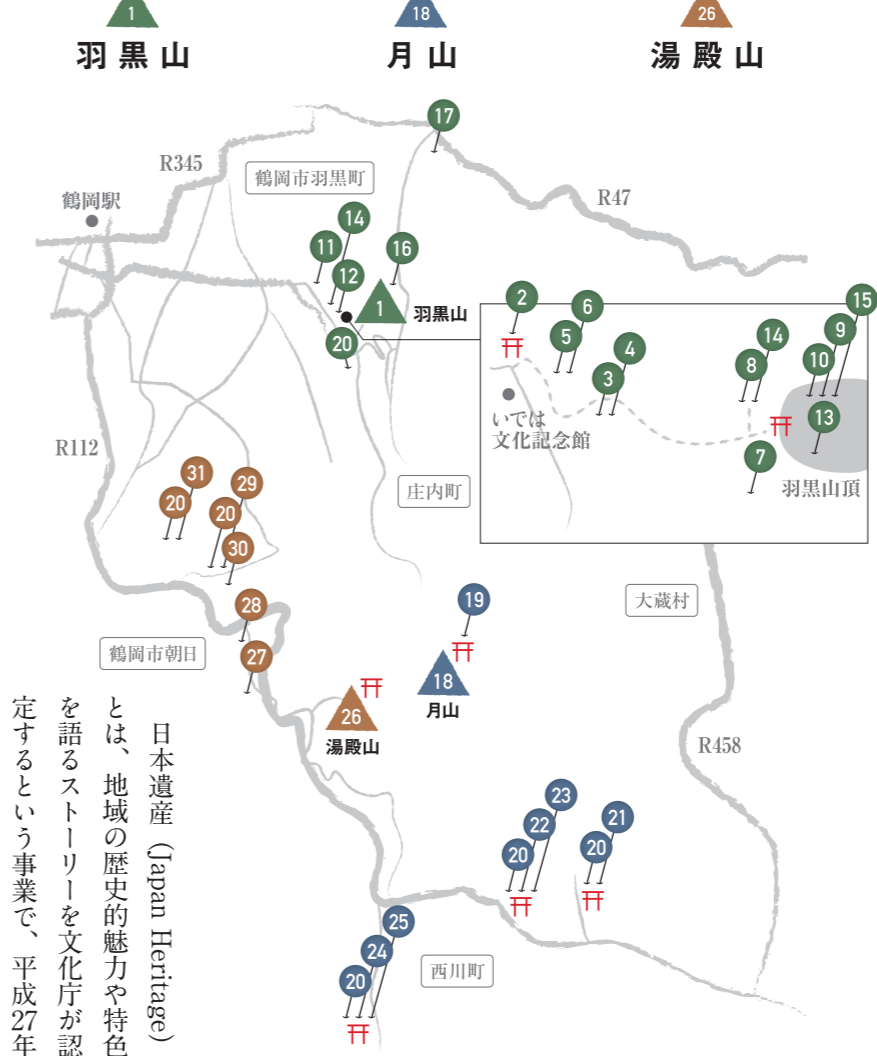
1 羽黒山



18 月山



26 湯殿山



日本遺産 (Japan Heritage) とは、地域の歴史的魅力や特色を語るストーリーを文化庁が認定するという事業で、平成27年

この夏、神聖な山の霊気に包まれながら文化財を辿る「生まれかわりの旅」で、心身をリセットしてみませんか。

出羽三山が県の申請で認定を受けたのは、平成28年4月。ストーリーは三山巡りが古より「死と再生の旅」といわれ、たことに由来する「自然と信仰が息づく『生まれかわりの旅』」樹齢300年を超える杉並木につつまれた2446段の石段から始まる出羽三山です。構成文化財は国宝羽黒山五重塔や六十里越街道など31件。鶴岡市、西川町、庄内町の有形・無形文化財が含まれています。

度に始まりました。目標は、そのストーリーを語る上で欠かせない文化財を、地元の人が活用しながら地域活性化を図ること。文化庁は外国人観光客の地方への誘いも意図し、平成32年の東京オリンピックまでに100件の認定を目指しています。

平成28年4月にストーリー「生まれかわりの旅」で日本遺産に認定された出羽三山。古からの神聖なる霊気を山の自然や文化財から感じてください。

日本遺産

# 「出羽三山」生まれかわりの旅

## 構成する文化財 31

Special Edition 出羽三山、時空を歩く

写真協力 = 出羽三山「生まれかわりの旅」推進協議会





## 出羽富士鳥海山行脚の御朱印帳

20年に一度の鳥海山大物忌神社の式年遷座。山頂の本社に使われる木材は伊勢神宮のひのき古材とか。そんなおめでたい年に生まれた御朱印帳です

山形県と秋田県にまたがり、豊富な伏流水をもたらすことで知られる鳥海山。出羽富士とも呼ばれるこの山はかつて、頻繁に噴火を繰り返すことから山全体が「大物忌神」と呼ばれていた。その名の意味は、穢れを清める神のこと。噴火を神の怒りととらえた朝廷は、山に異変があるたびに高い階を授けたという。

中世になると山岳信仰が盛んとなり、江戸中期には登拝道が開け、登り口にあたる吹浦と蕨岡は多くの道者で賑わった。蕨岡の上寺集落には宿坊も連なった。その後、明治の修験道廃止・神仏分離令を経てその姿は影をひそめ、今に至るが、鳥海山は今も大いなる信仰の山である。

そのことを思い起こさせる企画が今年5月に始まった。鳥海山を取り囲む山形県と秋田県の3市1町で構成する鳥海国定公園観光開発協議会のキャンペーン「出羽富士鳥海山行脚」である。山頂本社の20年に一度の式年遷座に合わせた取り組みで、本社・御浜神社・口の宮2社の大物忌神社を筆頭に、環鳥海エリアにある27寺社が参加。御朱印めぐりをしながら周辺の観光地にも足を運んでほしいという目論見だ。御朱印帳も作成した。デザインは両県から見える異なる鳥海山の姿を入れたものと、タイトルをデザイン化したものの2種。3色あるため計6種から好みを選べる。

この地で生きる人々を、時に噴火で脅えさせながらも包み込んできた鳥海山。その姿に見守られながらの御朱印めぐりはきつと、いつもと違う夏へ誘ってくれるだろう。しかし、印をいただくのは、参拝を済ませてからということだ。



御朱印参加寺社の詳細は、酒田市の公式HP内からリーフレットを確認ください。御朱印帳は常駐している参加寺社のほか「酒田夢の倶楽」、道の駅鳥海「ふらっと」でも数量限定で販売しています。なお、キャンペーンは来年3月31日まで。また鳥海山大物忌神社の遷座に合わせ、7月8日には吹浦口宮と蕨岡口宮で「遷拜式」が行われます。

酒田市観光振興課 ☎0234-26-5759



温海嶽の清流

庄内俳句紀行

清水汲み  
温海嶽を歩く

一年で一番日が長い頃になると早起きが楽しくなる。窓をあけると郭公の音が朝の空に響く。野鳥の音が聞きたくなり、温海嶽に向かった。

季語  
清水・泉  
(しみず・いずみ)  
岩の間や地面から湧く水。その清冽さを言う。

白雨のみね降りわけてあつみ山

— 暹阿

温泉街のはずれにある温海嶽登山口には、温海川に流れ込む溪流があり、立金花りゅうきんかがせせらぎの光を集め、その色を瞬かせていた。朝の爽やかな空気の中、日差しはすでに項うなじを刺してくる。

川沿いに歩を進めると、苔むした大きな岩に清水が流れ、その水底に岩魚いわなの姿を見る。傍の木々から声量豊かな囁ささやり



山毛櫨林と樺

聞こえる。声の先を辿ると、その声量からは想像もできない小さな鱒なまこの姿があった。

泉湧きゆがみて戻る鱒の列

— 水原秋櫻子

「古和清水」で喉を潤し、「一ノ滝」を見下ろす。「せせらぎの散歩道」から頂上を目指した。初夏の森には、緑のシンフォニーが響く。足元に沢繁さわは縷らが可憐に咲き、溪流には苔むした木の橋がいくつか掛けられ、「二ノ滝」、「出会いの滝」、「鶴見の滝」などの滝がある。溪流のほとりには、ひっそりと宝鐸ほうたく草が俯き加減に姿を見せた。

滝の上に水現れて落ちにけり

— 後藤夜半



温海嶽山頂からの眺め

新緑には何よりも純白が似合う。稚児ちご百合ゆりが囁き合い、雪笹ゆきささが、笹のような葉に純白の星を瞬かせている。山毛櫨まげの森は、強い初夏の日差しを優しい木漏れ日に変える。その陽光に輝く樺びらの若葉わがははまるで花が咲くように開く。森では、大瑠璃おほるりや黄鶺鴒きびたきの声も響く。

萬緑の底より水の湧き出づる

— あべ小萩

登山口から2時間ほどで温海嶽頂上に辿り着くと、熊野神社本殿がある。山頂からは日本海に粟島、遠くに佐渡が見える日もあるとか。この日はうつつすらと鳥海山、摩耶山の奥に月山が見え、朝日連峰、飯豊連峰を望む。山頂を渡る風が心地よく、その風と戯れるように蝶が舞っていた。

下山ルートでは、大きな山毛櫨や樹齢500年を超えると思われる「一本杉」、「大杉(婆杉)」の巨木に出会った。大杉の傍には熊野神社の旧拝殿跡が当時の跡を残していた。

温泉街にあるバラ園に下山し、振り返ると、温海嶽がいつもより大きくどっしりとしてそこにありのように感じた。



一本杉



雪笹

写真・文|| あべ小萩(月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員)  
写真協力|| 間真由美